

健康

徳大病院
元気を支える医療



滝沢宏光

呼吸器外科

診療科長・教授

最も推奨されます。胸腔鏡（内視鏡）を用いた手術が主流で、患者さんの体の負担が軽減されています。近年はロボット支援胸腔鏡手術も普及しつつあり、徳大病院でも多くのロボット手術が行われています。

肺がんは日本人のがんによる死亡原因の第1位です。しかし、早期に発見して適切な治療を行えば治癒の可能性は高まります。早期の場合、がんだけを温存すべき」との考え方が主流になって

手術では肺の一部を取り除きますが、切除範囲が広いと、階段を上る時などに息切れしやすくなります。以前は小さな肺がんでも比較的広範囲に切除することが多かったですが、最近では「できるだけ肺を温存すべき」と

最適な範囲 個々に設定

きました。広範囲に切除した患者さんが術後に他の病気に加わった際、体力的に余裕がなく十分な治療を受けられなかったり、寿命が短くなったりというデータが明らかになってきたためです。

このため、個々の患者さんに適した切除範囲を設定する重要性が高まっています。がんの進行度や呼吸機能検査、階段昇降試験などによる体力評価を総合的に行い、最適な切除範囲を決定するアプローチが重視されています。

ただ、肺をできるだけ温存する手術では、がんの取り残しがないよう注意する必要があります。がんの境界ぎりぎりでの切除すると再発リスクが高

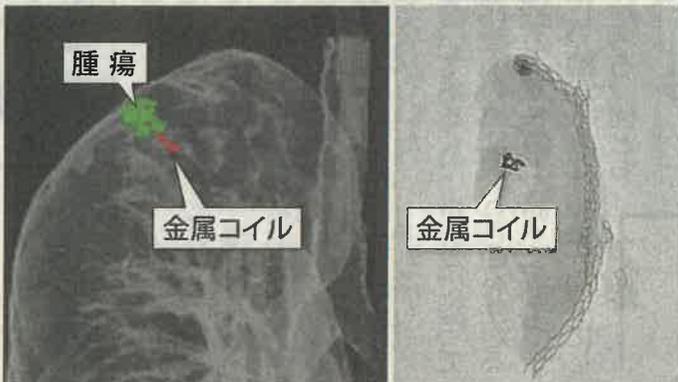
まるため、切除範囲を縮小する際は、術前の手術計画作成から手術中まで細心の注意と慎重な対応が求められます。

徳大病院では、手術計画作成に際して肺の血管・気管支と腫瘍の位置関係を立体的に把握できる3次元CT画像を使用します。術者や助手は術前に仮想現実（VR）ゴーグルで画像を確認しながら、切除範囲や手術手順を綿密に計画して手術に臨んでいます。そうすることで過不足のない適切な範囲での切除を実現しています。写真①。

小さながんは術中、どこにあるのか把握しにくく、適切な切除範囲の見極めが難しいこともあります。この問題を解決するため、徳大病院では金属製のマイクロコイルを用いたマーキングを積極的に行っています。全身麻酔下で気管支鏡を用いて腫瘍近くにマイクロコイルを留め置き、術中はエックス線で位置を確認し、最適な範囲でがんを切除しています。写真②。

さまざまな最先端技術を駆使し、患者さん一人一人に適した手術を安全かつ確実に提供しています。

肺極力温存しがん切除



【上・写真①】VRゴーグルで3次元CT画像を見て、がんの切除範囲などを調べる術者【下・写真②】腫瘍近くに金属コイルを留置した肺のCT画像(左)と、切除した肺のエックス線画像(右)